



1. このロードシーケンスを成立させるには、アプリケーション側で定義が必要になります。

記述例

```

;==== 1. ベクターテーブル ====
vector_table
    LDR pc, =Reset_handler           ; Start+0x0000 : リセット
    LDR pc, =Undefined_handler       ; Start+0x0004 : 未定義命令
    LDR pc, =Svc_handler             ; Start+0x0008 : ソフトウェア割り込み
    LDR pc, =Prefetch_handler        ; Start+0x000C : プリフェッチアボート
    LDR pc, =Abort_handler           ; Start+0x0010 : データアボート
    LDR pc, =Reserved_handler        ; Start+0x0014 : Reserved
    LDR pc, =Irq_handler             ; Start+0x0018 : IRQ
    LDR pc, =Fiq_handler             ; Start+0x001C : FIQ(NMI)
;==== 2. SFROM に登録したローダに渡す情報 ====
Info_table
    DCD |Image$$VECTOR_TABLE$$Base| ; Start+0x0020 : (A)内蔵 RAM 転送先の開始アドレス
    DCD |Image$$DATA$$Limit|         ; Start+0x0024 : (B)内蔵 RAM 転送先の終了アドレス(+1)
    DCD vector_table                 ; Start+0x0028 : (C)初期 PC 値
    DCD 0                             ; Start+0x002C : デバッグモードフラグ
                                     ;
                                     ; DEFnano を未使用にして、 USB0 を開放する場合は、
                                     ; 0xDEF0DEF0 を定義する。

```

2. 追加テーブルとして「Start+0x002C」にデバッグモードフラグがあります。

このフラグは、USB0 を使用したデバッガ (DEFnano) を使用せず、JTAG デバッガを使用して USB0 を開放したい時に定義します。

DCD 0xDEF0DEF0 ; Start+0x002C

と定義して基板上のシリアルフラッシュ ROM に記憶させるとローダが判断して USB0 が開放されます。

ただし、この定義をしますと二度と DEFnano を使用することができなくなります。

復旧方法は、JTAG デバッガ等でシリアルフラッシュ ROM アドレス「0x2_002C」番地を「0xDEF0DEF0」以外の数値に書き換えして下さい。

以上